

## トピックス

## 国際サーモン年が始まります

すずき けんご さとう しゅんぺい うらわ しげひこ  
鈴木 健吾・佐藤 俊平・浦和 茂彦（北海道水産研究所 さけます資源研究部）

## はじめに

国際サーモン年 (International Year of the Salmon, IYS) は、カナダの科学者 Richard Beamish 博士が北太平洋溯河性魚類委員会 (North Pacific Anadromous Fish Commission, NPAFC) に行った提案 (Beamish 2012) をもとに計画された活動です。NPAFC での計画検討を経て、NPAFC と北大西洋サケ保全機構 (North Atlantic Salmon Conservation Organization, NASCO) が協力して、北半球全体でサケの仲間に対する関心を広く呼び起こすためのプロジェクトとなりました (Young et al. 2017)。IYS は NPAFC の調査研究活動の重要な要素と位置づけられていますが、活動が広範囲に及ぶため NPAFC 事務局だけによる運営は困難です。このため、IYS 組織委員会 (Coordinating Committee, CC) を別に構成することとなり、この下に北太平洋運営委員会 (North Pacific Steering committee, NPSC) と北大西洋運営委員会 (North Atlantic Steering committee, NASC) を設置して活動する体制となっています (図1)。日本国内での活動体制としては、水産庁と水産研究・教育機構の共催の形としています。また、大学等の専門家の方々にテーマ検討委員として参加していただき、活動内容について意見を伺いながら進めています。

国際サーモン年では「Salmon and People in a Changing World : 変わりゆく世界におけるサーモンと人類」という視点から、私たちとサケとの関わりを還元力のある持続的な関係としていくことの重要性を訴えます。このため、調査研究の活性化だけでなく、さけ・ます類関連の情報提供および市民への啓蒙活動まで含めた総合的な活動の展開が計画されています。計画では、2016～2018年

を準備周知期間、2019年を国際サーモン年と制定してさけ・ます類に関する様々な活動を行い、それらの成果を2022年までに取りまとめてシンポジウムを開催することを目指しています。

## 国際サーモン年に関連する広報活動

## ① IYS オープニングイベント

日本が参加した北太平洋地域のIYSオープニングイベントは、2018年10月11日にカナダ・バンクーバー市のJack Poole Plazaで開催されました。本イベントにはNPAFC・NASCOの関係者、政府関係者、研究者、NGO、取材メディアなど、総勢150名ほどの参加者がありました。イベントはまず、カナダ先住民によるスピーチと先住民伝統の歌の披露から始まり、続いて Pacific Salmon Foundation (太平洋サケ基金) の Brian Riddell 博士から太平洋さけ・ます類が直面する現状と課題についての報告が、IYS事務局の Mark Saunders 氏から IYS プロジェクトの概要についての説明が、それぞれ行われました (写真1)。

この中で、2019年2～3月にアラスカ湾で行われる大規模な越冬期調査の計画が紹介されました。これは、現在もその詳細について不明な点が多い海洋における越冬期のさけ・ます類について、NPAFC 加盟国の研究者たちがロシアの調査船に乗り込み、アラスカ湾で漁獲調査をはじめとする様々な調査・研究活動を実施するものです。国際共同研究の推進を目指すIYSにとって、この越冬期調査が象徴的な事業となることが期待されます。次いで、カナダ・米国・韓国・日本からIYSの開催をお祝いするスピーチが行われました。特にカナダからは地元ブリティッシュ・コロンビア州の

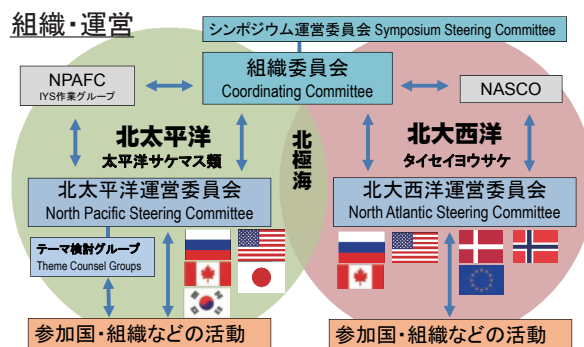


図1. 国際サーモン年 (IYS) 組織・運営体制



写真1. カナダ・バンクーバー市で開催されたIYSオープニングイベント

John Horgan 州知事が自ら出席されており、IYS の推進および成功への強い思いが感じられました。また、カナダおよび米国代表のスピーチは、さけ・ます類と先住民との関わりを強く意識した内容となっていたことが印象に残りました。日本からは在バンクーバー総領事館の多田雅代総領事代理にご出席いただき、日本におけるさけ・ます資源の重要性、日本の先住民であるアイヌとさけ・ます類との関わり、さけ・ます類の持つ文化的・社会的な価値の重要性等についてお話しいただきました。

## ② 国内での広報活動

日本国内でも、サケに関連するイベント等の機会を捉えて、IYS 活動に関する広報を行っています。今年、豊平川さけ科学館の主催する「さっぽろサケフェスタ 2018」(写真2)、標津サーモン科学館で開催された「サーモンパーク秋まつり」、北海道定置漁業協会主催の「秋さけ祭」などでIYS ポスター(裏表紙に掲載)の掲示やパンフレットの配布を行いました。また、北海道区水産研究所のサイトに「国際サーモン年 (IYS) ホームページ日本語版 (<http://hnf.fra.affrc.go.jp/iys/index.html>)」を開設しました。ホームページにはIYS 実施の背景、目標、研究テーマなどの情報を掲載しています。

## 国際サーモン年に関連する研究集会

### ① 日本水産学会シンポジウム

2018年3月にIYS ローカルシンポジウムとして日本水産学会主催、IYS 北太平洋運営委員会共催のシンポジウム「環境変動下におけるサケの持続可能な資源管理」が開催されました(写真3)。

このシンポジウムは日本のIYS活動の始点として、日本におけるサケの資源変動要因を多方面から考察するとともに、今後サケの持続的な資源管理を行うために必要な調査・研究課題を整理することを目的として行われました(Urawa 2018)。

シンポジウムではIYSの提唱者であるカナダのRichard Beamish 博士にIYSの意義について基調講演をしていただくと共に、国内のさけ・ます研究者14名による最新の研究発表が行われ、サケの資源変動要因や資源管理に関する活発な議論が行われました。その結果、フィールドワークや実験を通じてサケ稚魚の初期生残機構への理解を深めること、ふ化放流技術の改良、地域個体群および多様性の保全など、今後取り組むべき課題が指摘されました。なお、シンポジウムで発表された研究成果は、雑誌「海洋と生物」の特集記事(浦和ら 2018a, 2018b)として公表されています。

### ② NPAFC-IYS ワークショップ

2018年5月に、ロシアのハバロフスクでNPAFC 年次会議に引き続いて第1回NPAFC-IYS ワークショップが開催されました(写真4)。

このワークショップでは、サケの資源状態(Status of Salmon)に焦点を当てて、各国からサケ資源の現状について報告されました(Saunders 2018)。この中で、北太平洋に分布するいくつかの個体群に見られる共通の傾向として、各年齢における魚体サイズが小さくなっていること、若い魚が多くなっていること、北方の個体群の状況が良いことな



写真2. さっぽろサケフェスタ 2018 でのポスター展示



写真3. 2018年3月に開催された日本水産学会シンポジウム「環境変動下におけるサケの持続可能な資源管理」最前列左の人物が Beamish 博士



写真4. 2018年5月に開催されたNPAFC-IYS ワークショップでの研究発表

どが指摘されました。また気候変動に関連する話題として、河川の増水など、淡水環境の変化がさけ・ます類に影響を与えていると示唆されること、カラフトマス、サケ、ベニザケが北極海に進出する可能性があることなどが指摘されました。その他として、日本で取り組まれている海中飼育等の放流手法開発の報告にも関心が集まりました。

これらの研究発表の講演要旨はNPAFC技術報告(Park and Taylor 2018)として取りまとめられており、NPAFCのホームページ(<http://npafc.org/technical-report/>)から入手することが出来ます。

## おわりに

2019年のIYS活動は、本文中でもご紹介したアラスカ湾冬期調査のほか、5月には、気候変動とさけ・ます類の海洋生活期の関係に焦点を当てた第2回NPAFC-IYSワークショップがアメリカのポートランドで開催される予定となっています。その後、2021年まで、毎年1回のNPAFC-IYSワークショップを開催し、2022年にはとりまとめのシンポジウムを開く計画が想定されています。一方で、このような大規模な活動を行うための資金が潤沢にある訳ではありません。海洋を広く回遊するさけ・ます類の調査研究を行うためには、関係各国の連携が欠かせないのは明らかです。今後もIYS活動を継続していくために、活動内容の精査と効率的な実施を進めていく必要があります。また、IYS活動は多くの協力者の方々に支えられています。IYS計画策定にご協力頂いているテーマ検討グループの方々、広報活動の機会を頂いた豊平川さけ科学館、標津サーモン科学館、サケの

ふるさと千歳水族館、北海道定置漁業協会ほかの皆さまにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

## 引用文献

- Beamish, R.J. 2012. A proposal to establish an International Year of the Salmon. NPAFC Doc. 1425. 16 pp. Fisheries and Oceans Canada, Pacific Biological Station. (Available at [www.npafc.org](http://www.npafc.org))
- Young, M., Saunders M., and Radchenko V. 2017. Story of the International Year of the Salmon: Concept to Launch. NPAFC Tec. Rep., 10. 142 pp.
- Urawa, S. 2018. International Year of the Salmon Symposium Tokyo, Japan. NPAFC News Letter, 44: 14-24.
- 浦和 茂彦・荒木 仁志・宮下 和士・永田 光博・佐々木 義隆・帰山 雅秀. 2018a. 特集「環境変動下におけるサケの持続可能な資源管理 (1) . 海洋と生物, 40 : 315-357.
- 浦和 茂彦・荒木 仁志・宮下 和士・永田 光博・佐々木 義隆・帰山 雅秀. 2018b. 特集「環境変動下におけるサケの持続可能な資源管理 (2) . 海洋と生物, 40 : 415-466.
- Saunders, M. 2018. NPAFC holds the First International Year of the Salmon Workshop in Khabarovsk, Russia: Wrap-up summary and subsequent activities. NPAFC News Letter, 44: 25-32.
- Park, J., and Taylor, S. 2018. First NPAFC-IYS Workshop on Pacific Salmon Production in a Changing Climate. NPAFC Tec. Rep., 11. 140 pp.